

香小研国語部会研究発表会報告

高松市立国分寺北部小学校

研究主題

確かな学力を支える国語力の育成
- 語る子供の育成を目指して -

1 はじめに

2003年にOECDが行ったPIISA調査によると日本の子供たちの学力が低下し、特に広い意味での読解力の低下が指摘された。また子供たちの学ぶ意欲も低く、家庭学習の時間が減少しているといった課題も浮き彫りとなった。

そんな中、文部科学省は学習指導要領の改訂に着手するという意向を、平成16年12月17日に示し、改善のポイントとして「国語教育の重視」をあげた。また、文化審議会答申においても「これからの時代に求められる国語力」が示された。そこでは、「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」の4つの力を伸ばすことが必要であるとされ、特に「考える力」と「表す力」の重要性が強調されている。

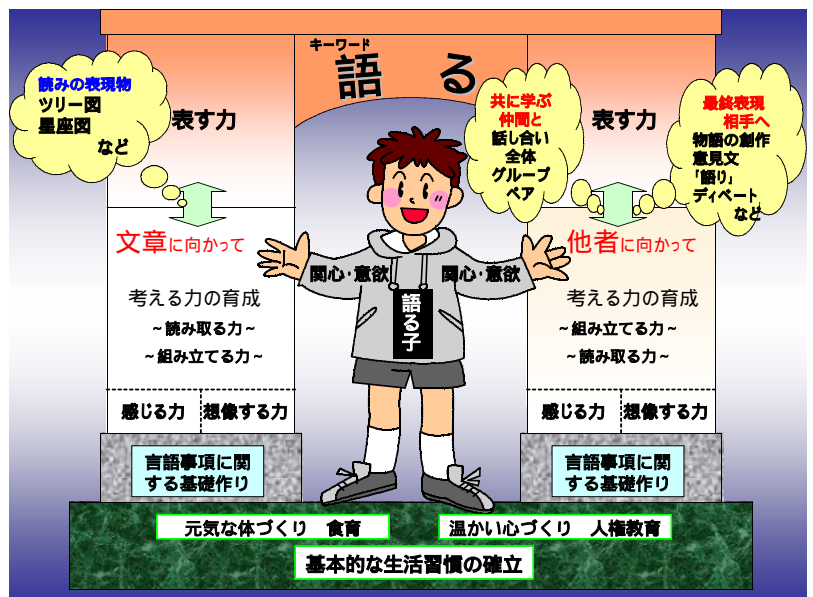
2 本校の実態

本校の児童は、平成16年度に実施した学習状況調査の結果、実施した4年生以上の全ての学年でおおむね好成績を収め、県平均より高い数値が出た。しかし、その中で若干課題が見つかったのは、高学年の「読む領域」で県平均を下回っていたことである。内容を詳しく見ていくと文章を読み取るということだけではなく、読み取ったことを自分の言葉で表現していくという段階においても抵抗を示す児童が少なくない。中でも気になるのは誤答ではなく、無答である。はじめから考えようとしないう、問題に手をつけないといった学習意欲面での課題も見付かった。

3 研究主題について

「語る」ということばを聞いたとき、ややもすると「表現能力」すなわち他者に向かって「語り」を行うことと捉えられがちである。しかし、本校がサブテーマに掲げている「語る子供」というのは、表面に表れてくる一方向を指しているのではない。

本校が目指している「語る子供」像とは、「主体的に文章に向かい、そこから得たものを意欲的に表し伝えようとしている能動的な子供」である。そこには、他者へと向かう子供の姿と共に、もう一方で文章へと向かう子供の姿を見出している。語るためには、文章を読み味わいその意味を深く考えなければ語れないし、またそこから得た思いや考えを伝えたいと願う強い意識や、そのための表現技能がなければならない。本校が目指しているのは、この両面で力を伸ばし、熱い思いをもって語る子供の育成である。



4 研究仮説と視点

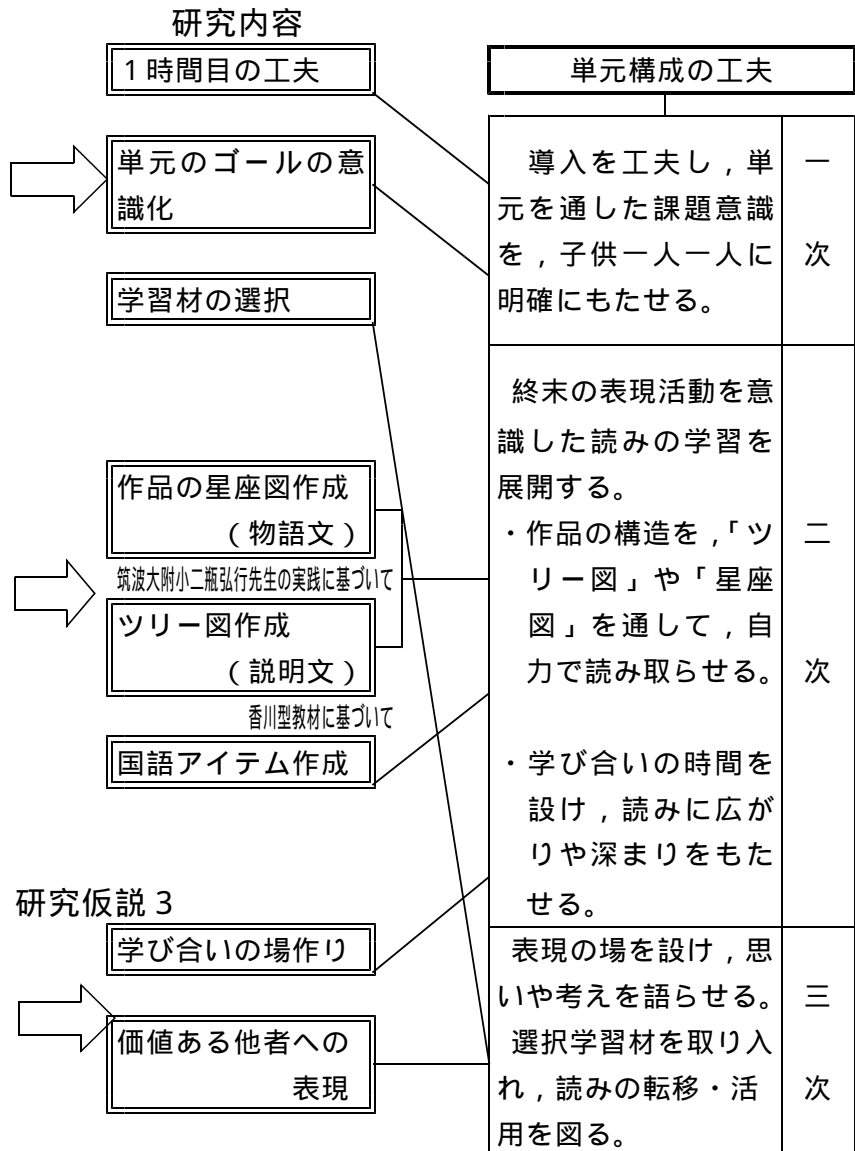
研究仮説 1

魅力的な教材との出会わせ方を工夫し，目的をはっきりともたせることができれば，語る子供の育成（主に「関心・意欲」の育成）につながるであろう。

研究仮説 2

文章との自問自答の方法 = 「自力読み」の方法を，系統的に指導していけば，語る子供の育成（主に「文章に向かって考える力」の育成）につながるだろう。

自分の思いや考えを他者に伝える経験を数多くさせれば，語る子供の育成（主に「他者に向かって考える力」の育成）につながるだろう。



5 実践

研究仮説 1 の「関心意欲を高めるための取り組み」について

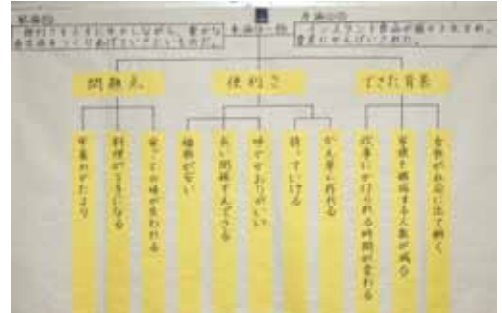
【6年の実践】説明文・物語文どちらも「20年後の再会を誓い，タイムカプセルを埋めよう」という卒業プロジェクトを元に単元構成した。そこには，写真や各クラスの思い出の年表，また，歌を吹き込んだテープなどに加え，「百年前の未来予測」の学習で自分たちが20年後の未来予測をした記事や「海のいのち」の学習で書き上げた「命の歌」の詩なども入れようと呼びかけ，子供たちの意欲を喚起させた。

【4年の実践】「ごんぎつね」のふるさとを訪れた教師の話ビデオと写真を使って聞かせた。新美南吉記念館では，矢口館長に会い，感想文を送らせていただくことになった。さらに，黒井健絵本ハウスでは，黒井健さんに会い，ごんぎつねの感想画を送らせていただくことになった。子供たちは，この目的に向かって，一生懸命読み，心をこめて感想文や感想画をかいた。尚，子供たちの作品に対して返事をいただけるようお願いした。

研究仮説2の「文章に向かって考える力」の育成について

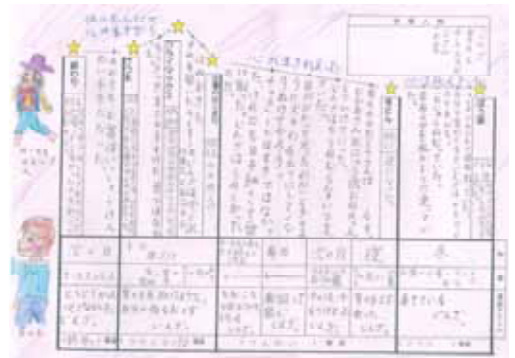
ツリー図とは説明文の全体構造をつかむ方法として香川型教材が紹介しているものである。本校でも積極的に活用し、説明文の読解のパターンとして取り組んだ。

【5年の実践】「インスタント食品とわたしたちの生活」では、自力読みの力を養うために教材文を連続型テキスト、ツリー図を非連続型テキストと考えて比べ読みをした。また単の後半では、討論メモを作る際、読み取りに使ったツリー図を活用した。話の組み立てにツリー図を使う。ツリー図型の討論メモは、論の組み立てがひと目で分かる。そして、文章ではないので原稿を棒読みすることがない。このように、ツリー図を、読み取りだけでなく表現のための支援としても活用した。



作品の星座図とは主に物語文の全体構造をつかむ方法として、作品の6つの点と4つの場面を追いかけながら物語を読み進め、最終的には作品の主題を個々に読み取っていくものである。

【3年の実践】「サーカスのライオン」では、物語を4場面構造で捉える星座図の特徴を生かし学習を進めた。4つの場面を比べ読みすることで、登場人物の変化を追っていくのである。例えば導入場面「じんざは一日中眠っていた」と展開場面「もう眠らないうまっていた。」を比べることにより、その気持ちの変化を捉えさせるといふように。4場面構造を意識した読みは、他の物語にも転移活用しやすいという利点がある。



【6年の実践】「海のいのち」では星座図を書くことがいかに作品の心をつかむことにつながるかを提案授業した。たとえば、物語の設定からその人物関係図を整理し、作品の心に迫っていったり、また題名の言葉を置き換えたり、つないだりしながら、ウエービングで作品の心をつかんでいった。このように、星座図から作品の心を読む学習に取り組んだ。

【国語アイテムの作成】

国語アイテムとは、読みの観点を、カードとして蓄積していき、子供一人一人が持っておくようにするものである。前の単元で学習した読みの観点を、次の単元においても転移・活用するためである。まさに子供が自力で文章を読んでいくためのアイテムである。



研究仮説3の「他者に向かって考える力」の育成について

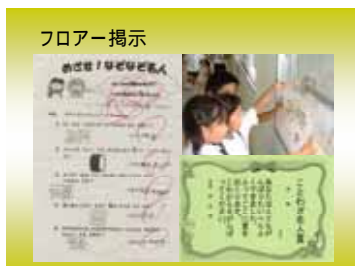
【2年の実践】「かさこじぞう」では、読み取ったことを群読で表現しようとした。音読ではなく群読をすることで、「だんだん声を大きくするところは人数を増やしてみよう」「大年の市の様子はにぎやかだから、みんなで声を重ねて読もう」など、一人ではできなかった工夫を話し合うことができた。その後、グループ内や他のグループとの交流も行い、表現のよさを取り入れることで、おはなしぼけっとさんやおうちの人に喜んでもらえる群読まで高めた。

価値ある他者への表現では、「ビーバーの大工事」で、単元のゴールにおける表現相手を

保護者として、自分の選んだ動物について調べて紹介するという学習を進めた。その途中で、校外学習で出会った白鳥動物園の園長さんに専門的な立場から、調べたことが分かりやすく表現できているかの評価をもらい、もう1度自分たちの紹介を見直すという活動を組んだ。

日常実践の取り組み

授業を支える部分での言語活動の充実を図るために、校内環境を整備したり、教育課程の中で、朝の活動を見直したりした。



校内環境整備



群読集会

6 成果と課題

研究仮説1を受けて

国語が好き、授業が楽しいと答えてくれる子供が増えた。16年度は半数を下回っていたが、2年目3年目はともに70%近くの児童が国語を好きと答えるようになった。進んで学習に取り組む児童が増えた。たとえば読書の様子を見てみても、読書量が増えた・夢中で読書をすることがあると答える児童がともに増えている。

研究仮説2を受けて

6年間を見通した学習スタイルを考えたことで、縦の系統性がはっきりとしました。全教材の「ツリー図・星座図集」を作成したことで、教師自身が単元で教える「読みの力」を意識して授業に臨むようになった。ツリー図・星座図は一つの方法として取り組んできたが、達成率としては、ツリー図が約70%以上、6つの点でとらえる星座図に関しては実施1年目の3年生が51%に対し、実施2年目の4・5・6年生は約80%であり、読みの力は確実に定着していることがうかがえた。

国語アイテムの活用により、読みの力の転移・活用を図れている。

仮説3を受けて

学びあいの時間を多くもったことで、友だちとの交流を活発に行えるようになった。単元の終末に価値ある他者への表現活動を位置づけたことで、子供たちが思いをこめて生き生きと音声言語や文字言語にして表現するようになった。

今回の研究は説明文と物語文に絞って研究を行ってきたが、ここで身についた読みの力を他の領域や他教科へ転移活用させるための支援のあり方をさぐっていきたい。個による能力差に対応し切れなかった面があった。自力読みの力は学年の発達段階に合わせると同時に個人差に応じた細かいステップを踏む必要がある。少人数指導等の学習形態や指導方法の工夫をさらに加え、それぞれの子供にあった支援のあり方も考えていきたい。